

1 元旦に

門松を立てることも、雑煮をたべることも、賀状を出すことも、実は、本当を言えば、なにを意味しているかよくは判らない。しかし、これだけは判っている、人間の一生が少々長すぎるので、神さまが、それを、三百六十五日ずつに区切ったのだ。そして、その区切り、区切りの階段で、人間がひと休みするということだ。

私は神さまが作ったその階段を、ずいぶんたくさん上がって来た。今年はその五十段目だ。昭和三十二年の明るい陽の光を浴びて、私はいまひと休みしている。はるか下の方の段で、私の四人の子供たちも、それぞれ新しい着物を着て、いまひと休みしている。

2 ムカデの足

むかでの歩くのを見てみると、あのたくさんの足が実に整然とした運動をしている。一種の疎密波が身長に沿うて虫の速度よりは早い速度で進行する。

もしか自分がむかでになってあれだけのたくさんな足を一つ一つ意識的に動かして、あのような歩行をしなければならいとしたら実にたいへんである。思ってみるだけでも気が狂いそうである。

しかしよく考えてみると人間の一手一投足にも、実はむかでの足の神経などに比べて到底比較のできないほど多数の神経細胞が働いているであろう。そんなことは夢にも考えないでむ

かでの足を驚嘆しながら万年筆をあやつってこんなことを書くという驚くべき動作をなんの気もなく遂行しているのである。

3 空車

わたくしはこの車が空車として行くにあうごとに、目迎えてこれを送ることを禁じ得ない。車はすでに大きい。そしてそれが空虚であるがゆえに、人をしていつそうその大きさを覚えしむる。この大きい車が大道せましと行く。これにつないである馬は骨格がたくましく、栄養がいい。それが車につながれたのを忘れたように、ゆるやかに行く。馬の口を取っている男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の霊でもあるように、^{おおまた}大股に行く。この男は左顧右眄^{さこうべん}することなさない。物にあつて一步をゆるくすることもなさず、一步を急にすることをもなさない。旁若無人^{ぼうじゃくぶじん}という語はこの男のために作られたかと疑われる。

この車にあえば、徒歩の人も避ける。騎馬の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍^{たいご}をなした士卒も避ける。送葬の行列も避ける。この車の軌道を横たわるに会えば、電車の車掌といえども、車をとめて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。

そしてこの車は一の空車に過ぎぬのである。

4 奥の細道

01 序文^{じょぶん}

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくもの古巢をはらひて、やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関こえんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。

ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松島の月まず心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も 住替る代ぞ ひなの家
面八句を庵の柱にかけ置く。

02 旅立ち

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月はありあけにて光おさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそし。

むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。

千じゆといふ所にて舟をあがれば、前途三千里の思い胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。

行く春や 鳥啼魚の 目は泪

これを矢立の初として、行く道を進まず。

人々は途中に立ちならびて、後ろかげの見ゆるまではと見送るなるべし。

5 菜の花と小娘 作：志賀直哉

或る晴れた静かな春の日の午後でした。

一人の小娘が山で枯れ枝を拾っていました。

やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃、小娘は集めた小枝を、小さい草原に持ち出して、そこで自分の背負ってきた荒い目籠に詰めはじめました。

そうして、しばらくたちました。

すると、小娘はふと誰かに自分が呼ばれたような気がしました。

「ええ？」小娘は思わずそう言って、立ってそのへんを見回しました。

が、そこには誰の姿も見えませんでした。

「誰？ 私を呼ぶの。」小娘はもう一度大きい声でこう言ってみましたが、矢張り答える者はありませんでした。

二三度そんな気がして、初めて気がつく、それは雑草の中からただ一本、わずかに首を出していた憐れな小さい菜の花でした。

小娘は頭にかぶっていた手ぬぐいを取って、顔の汗を拭き拭き近寄って行きました。

2013107001.jpg

「お前、こんなところで、よくさびしくないのね。」

「さびしいわ。」と菜の花は親しげに答えました。

「そんならならなぜ来たのさ。」小娘は叱りでもするような調子で言いました。

すると菜の花は、「ひばりの胸毛に着いてきた種が、こここぼれたのよ。困るわ。」と悲しげに答えました。

そして、どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行ってくださいと頼みました。

小娘は可哀そうに思いました。

小娘は菜の花の願いを、かなえてやろうと考えました。

そして静かにそれを根から抜くと、自分の荷物を背負い、それを片手に持って、山路を村の方へと下って行きました。

清い小さな流れが、水音をたてて、その路にそうて流れていました。

「あなたの手は随分、ほてるのね。」

しばらくすると、手の菜の花は不意にこんなことを言い出しました。

「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、まっすぐにしていられなくなるわ。」

そう言いながら、菜の花はうなだれた首を小娘の歩調に合せ、力なく振っていました。

小娘は、ちよつと当惑しました。

そして、心配そうに、「苦しいの？」と下を向いてしまった菜の花を、のぞき込んで言いました。

「そんなでもないの、いいの。心配なさらないでも。」

菜の花は苦しいのを我慢して答えました。

小娘には図らず、いい考えが浮かびました。

「いい！ いい！」と小娘は言いました。

そうして身軽く道端にしゃがむと、そのまま黙って菜の花の根を流れへ浸してやりました。

「まあ！」

菜の花は生き返ったような元気な声を出して小娘を見上げま

した。

すると、小娘は宣告するように、「このまま流れて行くのよ。」と言いました。

菜の花は不安そうに首を振りしました。

「先に流れてしまうと恐いわ。」

「大丈夫。心配しなくてもいいの。」

そう言いながら、早くも小娘は流れの表面で、持っていた菜の花を離してしまいました。

「恐いは、恐いわ。」と流れの水にさらわれながら、菜の花は見る見る小娘から遠くなるのを心配そうに叫びました。

が、小娘は黙って立ち上がると、両手を後へ回し、背で跳る目籠をおさえ、駆けて来しました。

菜の花は安心しました。そして、さも嬉しそうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

どこからともなく気軽な黄蝶が飛んできました。

そして、うるさく菜の花の上について飛んできました。

菜の花はそれを大変嬉しがっていました。

しかし黄蝶は、せっかちで、移り気でした。

そして、いつとはなしに、又、どこかへ飛んでいってしまいました。

菜の花は小娘の鼻の頭にポツポツと玉のような汗が浮かび出しているのに気がきました。

「今度はあなたが苦しいわ。」と菜の花は心配そうに言いました。

が、小娘はかえって「心配しなくてもいいのよ。」と不愛想に答えました。

菜の花は、叱られたのかと思って、黙ってしまいました。間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。

菜の花は流れに波打っている髪の毛のような水草に、根をからまれて、さも苦しげに首をふっていました。

「まあ、少しそうしてお休み。」

小娘は息をはずませながら、傍らの石に腰をおろしました。

「こんなものに足をからまれて休むの、気持が悪いわ。」

そう言いながら、菜の花は尚しきりにいやいやをしております。

「それで、いいのよ。」小娘は汗ばんだ真つ赤な顔に意地悪な、しかし親しみのある笑いを浮かべて言いました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気持が悪いの、どうか一寸あげてちょうだい。どうか。」

「いいのよ。」小娘は笑って取り合いません。

が、そのうち水のいきおいで菜の花の根は自然に水草から、すり抜けて行きました。

そして、不意に、「流れるうー」と、大きな声を出して菜の花はまた、流されて行きました。

小娘も急いで立ち上がると、それを追って駆け出しました。

少しきたところで、「やっぱりあなたが苦しいわ。」と菜の花はこわごわ言いました。

「何でもないの、心配しなくてもいいの。」

今度は小娘も優しく答えてやりました。

そうして、菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より二三間先を駆けて行くことにしました。

20131107002.jpg

麓の村が見えてきました。

小娘はふり返らずに、「もうすぐよ。」と声をかけました。

「そう。」と、後で菜の花が言いました。

それきりしばらく話は絶えしました。

ただ流れの水温にまじって、バタバタ、バタバタ、という小娘の草履で走る足音が聞こえていました。

ポチャーンという水音がしました。

と、すぐ、小娘は菜の花の死にそんな悲鳴を聴きました。

小娘は驚いて立ち止まりました。

見ると菜の花は、花も葉も色がさめたようになって、「早く早く。」と延びあがっています。

小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ。」

小娘はその胸に菜の花を抱くようにして、後の流れを見回しながら訊きました。

「あなたの足元から何か飛び込んだのよ。」

菜の花はまだ動悸が治まらないように、言葉を切りました。

「いば蛙なのよ。一度もぐって、不意に私の顔の前に、浮かび上がったのよ。口の尖った意地の悪そうな、あの河童のような顔に、もう少しで、頬つぺたをドスンとぶつけるところでしたわ。」

それを聴いて小娘は、大きな声をして笑いました。

「笑い事じゃあ、ないわ。」と菜の花はうらめしそうに言いました。

「でも、私が思わず大きな声をしたら、今度は蛙の方でびっくりして、あわててもぐってしまいましたわ。」

こう言って菜の花も笑いました。

間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の花畑に一緒にそれを植えてやりました。そこは山の雑草の中とはちがつて土がよく肥えておりました。菜の花はどんどん延び育ちました。

そうして、今は多勢の仲間と仲よく、仕合せに暮らせる身となりました。

6 石臼の歌

田舎では自分の家で石臼を回して小麦やお米を粉にし、団子やうどんを作ります。千枝子はごろごろつという石臼の歌が大好き。八月になると、千枝子のお父さんの弟の子供である瑞枝が、広島からやってきました。ところが、八月六日、広島には原爆が落とされ、広島に残っていた瑞枝の両親は一度に亡くなっています。

もう明日はお盆の十三日。お墓の掃除をして、魂をお迎えせねばなりません。

しかし、お婆さんの碾き臼は、一向に動きませんでした。薄の前に座ったまま、言葉少なく考え込んでいるお婆さんのそばで、臼は黙っていないのでしょうか。

「お婆あさん、私は引くわ。」千枝子は、お婆あさんを慰めるように優しく言って、臼のそばに座りました。

「そうかい。お婆さんは、精も根も尽きてのう。力が出んのじゃ。」

千枝子は、臼の取つてを握って回し始めました。迎え団子はお米の粉なので、臼は重たいのです。ゴロゴロ始めると、瑞枝がそばへやってきて、「お姉ちゃん、私もやるわ」と、すぐに手をかけました。瑞枝はまた碾き臼に慣れないけれど、それでも二人して回すと、臼は半分の重たさになります。

「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんしてー。」臼が歌い始めました。千枝子も瑞枝も、額にじっとり汗が出てきました。

7 銀杏が衣を脱ぐ時

毎年、秋も深まって朝夕の冷え込みが厳しさを増す今時分になると、北の郷里の菩提寺の境内にある銀杏の巨木のことがかかる。

気にかかると言っても、その銀杏が老木だから、台風でも来たら大枝が折れやしないかと心配するのではない。今年の落葉はもう終わったか、どうか。まだなら、落葉するまでにあと何日ぐらい間あるだろうか。そう思って気が揉めるのである。

その銀杏は大木だから、葉を厚く繁らせていて、秋の黄葉は誠に見事である。それに、落葉の光景も思わず息を呑むほどのものであるらしい。私はまだ見たことがないから、予定が立つようなら、一度出かけてみてほしいと思っている。けれども、銀杏としても落葉の予測などつくわけがないだろう。

一枚や二枚の落葉なら話は別だが、この銀杏の葉は、短時間で一枚残らず落ちてしまうのだから。霜が降りたのではないかと思われるほど冷え込みのきつい、かんと晴れ渡った朝だと思っ

て頂きたい。裏山から昇る朝日の光芒が、庫裏の屋根を乗り越えて境内へ降りてくる。

まず、銀杏の一番てっぺんに朝日が当たる。すると、暖められた葉が一枚、ひらと枝先を離れて、舞い落ちる。それを合図に、陽に浴びた葉が次から次へと落ち始める。ひっきりなしに落ちる。

銀杏は、暫しさわさわという落葉の音に包まれる。まるで分厚い黄金色の衣を足元へ脱ぎ落とすかのように、銀杏はみるみる裸になっていく。

銀杏に訊きたい。今年の落葉はいつごろになろうか。

8 秋晴れ

9 小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子^{ゆうし}悲しむ
緑なすはこべは萌えず
若草も籍^しくによしなし
しろがねの衾^{ふすま}の岡^{おか}辺^べ
日に溶けて淡雪流る
あたゝかき光はあれど
野に満つる香^{かおり}も知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色わずかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛（歌哀し）

千曲川いざよう波の
岸近き宿にのぼりつ
濁^{どろ}り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

10 雨ニモマケズ

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテキル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ※（「蔭」の「陰のつくり」に代えて「人が
しら／影のへん」、第4水準2-86-78）ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ
 西ニツカレタ母アレバ
 行ッテソノ稻ノ束ヲ「#「束ヲ」はママ」負ヒ
 南ニ死ニサウナ人アレバ
 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
 北ニケンクワヤソシヨウガアレバ
 ツマラナイカラヤメロトイヒ
 ヒドリノトキハナミダヲナガシ
 サムサノナツハオロオロアルキ
 ミンナニデクノボートヨバレ
 ホメラレモセズ
 クニモサレズ
 サウイフモノニ
 ワタシハナリタイ
 南無無辺行菩薩
 南無上行菩薩
 南無多宝如来
 南無妙法蓮華經
 南無釈迦牟尼仏
 南無淨行菩薩
 南無安立行菩薩

11 大阿蘇

雨の中に馬がたっている
 一頭二頭仔馬をまじえた馬の群が 雨の中になっっている

雨は蕭々しょうしょうと降っている
 馬は草を食べている
 尻尾も背中も鬣たてがみも ぐっしより濡れそぼって
 彼らは草をたべている
 あるものはまた草もたべずに きよんとしてうなじを垂
 れてたっている
 雨は蕭々と降っている
 山は煙をあげている
 中獄の頂から うすら黄ろい 重っ苦しい噴煙もうもうが濛々とあ
 がっている
 空いちめんの雨雲と
 やがてそれははじめもなしにつづいている
 馬は草を食べている
 草千里浜のとある丘の
 雨にあらわれた青草を 彼らはいっしんにたべている
 たべている
 彼らはそこにみんな静かにたっている
 ぐっしよりと雨に濡れて いつまでもひとつところに 彼
 らは静かに集まっている
 もしも百年が この一瞬の間にたったとしても何の不思議
 もないだろう
 雨が降っている 雨が降っている
 雨は蕭々と降っている